

「都市再生」とは、人間性が多様に発揮される都市空間の再生であるはずだ。都市の「ルネサンス」＝人間復興に、理論と実践から迫る。

# 都市のルネサンスを目指して

東京大学 西村幸夫

## 本当の都市のルネサンスとは何か

### ● 21世紀の都市を構想する

この時期に本当の都市の再生——ルネサンスを問うということはどういうことなのか。

それは20世紀とは異なる21世紀の都市を構想することである。では、20世紀の都市と21世紀の都市はどのように異なるというのであろうか。それは、ある意味で自明である。20世紀の100年間に日本の人口はおよそ3倍ちかくに爆発的に増加した。そして同時に増加した人口の大半が農村を離れ、都市へ向ったのが20世紀だった。このような歴史はかつて日本のどこにもなかった。じつに異常な都市爆発の歴史だったのである。

しかし、これまた異常なことに、こうした前代未聞の都市人口急増の時代をわたしたちはさほど特異なこととも実感することもないままに21世紀に突入してしまっているのである。

つまり、これまでの100年の当たり前だと思いつけてきたことの異常さを、初めて客観的に見直し、それではどうであれば正常なのかを足を地につけて考えるというのが、21世紀に入った日本人がまさききやらなければならないことなのである。

たとえて言うと、どういうことだろうか。秩序立ち、計画され、効率的な都市こそよい都市だというような常識、広い道の方が狭い道より優れているという常識、人口の大きい都市ほど格が上であるという常識、大都市にこそ職があふれ、その職を求めて人が集まるといふ常識、大都市にこそ文化が生まれるといふ常識、匿名性の高い大都市の孤独という常識、都市が農村を収奪するという対立の構造の常識、活力のある都市は常に変わり続けるといふ常識……。こうした常識からまず疑うということではないだろうか。

### ● 「強者の時代」 20世紀から21世紀の新しい常識の確立へ

20世紀はまた、強者の論理の時代だった。すべて右肩上がりの時代だったのだから、競争のなかで生きなければならず、公正で平等な競争が時代のルールであった。正しく機能する市場がすべてを解決してくれる。大量生産が大量消費時代を作っただけでなく、大量消費をまかなうためにも大量生産が求められた。これが時代の正義だった。

大量生産の時代はまた、製造者が商品のありかたに粹をはめ、最大公約数的な商品を追究する仕組みですべてが支配されていた。少数者は好むと好まざるとに拘わらず、切り捨てられる運命にあったのだ。

強者の論理は得てして環境にしわ寄せをもたらす。過剰生産やそのための資源の過剰な収奪

が環境に不可逆的な負荷をもたらす。環境には強者の後見が期待できない。機会均等の競争社会は競争のフィールドそのものを痛めてしまっている。こうして20世紀は環境破壊の世紀になってしまった。

21世紀は、こうしたチャレンジを受けて立ち、新しい常識を確立すべき世紀である。

たとえば、20世紀の都市の常識に対しては、つぎのような逆説的な問いかけができればよい。自然発生的な地区や道には滋味があふれているとはいえないか、無駄が安全を保障しているとはいえないか、職場を求めて人が動くのではなく、人材を求めて職場がうごくことだっているのではないか、田舎にこそ人間味あふれた文化があるとはいえないか、場所に制約されないネットワーク社会が築かれつつあるのではないか、都市と農村とは補完関係にあるのではないか、地域の安定こそ活力の元ではないか――

本当の都市のルネサンスを問うということは、私たちのものの見方そのものに再考を迫ることなのである。私たちの日常感覚こそ問われているのだ。

20世紀が強者にとって居心地の良い世紀であったとしたら、21世紀は弱者が弱者ではなくなることのできる世紀であるべきだろう。疲弊した工場跡地の再生に消長されるようなおおきな規模での環境の再生が重要な課題となる。都市の再生はけっしてプロジェクトベースで達成さ

れるようなものではない。身近な環境と向き合い、これを根気よく回復させていくプロセスなのである。

また、高齢者や障害者、あるいは低所得者などに救済できるかがおおきな課題となる。こうした人々の声はなかなか政治的にも経済的にも聞き届けられにくい。彼らの声が政治に反映されるような仕組みが整えられていないからである。生産者でも経営者でも、労働者でもはたまた消費者ですら、社会的にその利益を代表するようなスポークスマンが作り出されてきた。しかし、高齢者や子供たち、子育て中の主婦には政治的な代弁者はいない。政治的にも20世紀は強者の時代だったということが実感される。

### ●都市環境の善とは？

都市内の環境を見ても、これまで善とされてきたものが、いかに機能主義的であったかが実感されるだろう。たとえば、狭い道路は自動車の通行に不便だという理由から忌避されてきた。しかし、幅広い道は自動車には都合が良いだろうが、歩いて快適な道とは別物だろう。身体感覚にフィットした心地よい散歩道とは、屈曲し、入り組んで先が見えず、通過交通もないような静かな路地のはずである。

考えてみると、世界初の量産車であるT型フォードが発売されたのが1908年なので、自

動車はまったく20世紀の産物である。19世紀までの数千年に及ぶ人間の都市社会の歴史の中でまったく経験してこなかった自動車というものの登場によって、人間の都市空間を見る目が著しく偏ってしまった。自動車の通行に便利か否かだけで街路が値踏みされるようになってきたのである。

ただし、このような現象があと100年ももつのかどうか、はなはだ疑問である。ちょうど1900年の人間が2000年の自動車社会を想像だにもしなかったように、2007年の私たちが2107年の都市空間の評価軸を想像することはほとんど不可能である。確実にいえることは、現在まちなかを走っているような自動車が人間の最有力な移動手段ではなくなっているだろうということだ。

予言することはできないが、おそらくは、もっと人間くさい、小回りのきく移動手段が時代の主流となっていくだろう。そうしたら、狭い路地を見る目も異なってくるに違いない。少なくとも、自動車にとって不便だからという理由で路地を煙たがる必要はなくなるだろう。

### ●21世紀の「郊外」と「中心市街地」

郊外の問題にしても同様である。

日本の都市の顕著な特徴のひとつに「豊かな郊外」という環境の概念も実態も形成されてこなかったことが挙げられる。郊外は、いくつか



の例外を除いて、あとからあとから押し寄せ、新規の都市移住者層を受け容れるための安価な住宅地として無計画に拡大していった。これも20世紀日本が生み出した負の遺産といえるかもしれない。これを21世紀にどのように転換していけばいいのかが。

人口減少下の21世紀の日本の都市においては、容赦のない郊外の選別が始まるだろう。これには住宅地だけでなく、郊外型のショッピングセンターも含まれることになる。こうした状況下、歯抜けになった郊外地を空地の側で戦略的に緑化を図り、より住みよい住宅地へ転換する動きが活発化してくるだろう。いわば緑の都市へのスプロールである。

対する中心市街地はどうだろうか。都心へ定住人口が戻ってくる現象は当分続くことが予想される。都心が比較的高齢の居住者によって支えられる福祉の拠点となることは想像に難くない。手厚い福祉は経済波及効果も大きい。

さらに都心の商業も公共交通機関も全体の重心を高齢者に移してくるだろう。都心は豊かな高齢者によって支えられた成熟した文化の拠点となっていくだろう。

### ●都市のルネサンスの実現に向けて

それでは、どのように考えたらこうした21世紀型の都市のルネサンスは可能だといえるのか

だろうか。

ひとつには、20世紀の人口急増時に較べても引けを取らないような急速な人口減少の予測がある。おそらく22世紀に入る時点で、日本の人口は現在の約半分にまで減少しているはずである。そしてたんに人が減るだけではなく、人口の年齢別構成が変わる。現在約20%の高齢者の比率が2050年には人口の約32%を占めるまでに肥大化すると予測されている。

つまりこれからの100年、日本はこれまでの時代とは対照的に、ジェットコースターが急降下するような人類史上まれにみるような人口減に見舞われることは確実なのである。

そこでは価値観の大転換が急激に起こることが予想される。そのモメントを建設的に捉えることができたなら、今世紀における都市のルネサンスは十分可能であろう。ピンチであるからこそ、チャンスに化けることもあるのだ。

もうひとつ、これからの日本の100年を支えてくれる可能性があるのは情報化の技術である。先に20世紀は大量生産と大量消費の時代であったと書いたが、これと比較すると21世紀は少量多品種生産とこだわり型消費の時代であるだろう。生産者があらかじめ消費者の行動を想定して大規模生産をおこなうという20世紀型の製造システムではなく、消費者側が自分にあつたものを注文し、ほかにはない独自の製品を注文通りに一品生産するという中世的な生産シス

テムが21世紀には主流となるだろう。すでに世界最大のパソコンメーカーであるデル社の販売スタイルにおいて、消費者主導型の受注生産システムが機能しているのである。

ITはまた、地域間の情報格差や距離の格差をなくしてしまおう力を持っている。世界中のひとが、インターネットに接続さえされれば、巨大な情報リソースを平等に享受できるだけでなく、不特定多数に対して自由に情報発信できる手段も手に入れたのである。

こうした新しい武器を手には、21世紀の都市問題に立ち向かうとするならば、あたらしい戦略も開けてくるのではないだろうか。とりわけ、ネットワークのあり方が従来の地縁型のつながりを超えて、テーマによって自由に仲間と繋がる柔軟なものとなったことは新しいコモンズを生み出す可能性を秘めている。

イタリアに端を発するヨーロッパのルネサンスは文芸や絵画、建築などに限らず、幅の広い人間中心の文化運動であった。だからこそ時代を超えて普遍的な影響力を後世に与えることができた。現在私たちが課題として直面している都市の再生——ルネサンスも究極的には人間中心の文化運動であることによって都市の可能性を幅広く展望してくれるものになるだろう。都市の再生とはそこに住むひとびとの再生、その豊かな生活スタイルの復興にはからならないからである。